

クルマの短歌

窓の外を見てみよう。ほどこからでも一台は自動車の姿があるのではないだろうか。そんなわれわれにとつて身近な存在であるクルマの、ことに具体的な固有名詞の詠みこまれた短歌をおもしろく読んでいる。ひとまとめに並べてみたらどうだろう、と集めてみた。最近ではこんな歌に出会った。

時速一〇〇キロ赤いベンツで走つてるああ

春ぞかし東名の昼 馬場あき子「短歌研究」五・六

月号 二〇二三年

ベンツ〈が〉ではなく〈で〉。主体的である。時速を数値で把握しているのも運転席前のディスプレイの目盛が視界に入る位置だろう。しかし馬場自身が運転しているというのは考えにくく、おそらく助手席か後部座席かで、高速道路沿いの山々を彩る野生の桜などが見えるのを優雅に愉しんでいる風情だ。とうめい、は透明感も呼び寄せて、疾風と一体となる快感も伝わる。

時速一〇〇キロの車、メルセデスベンツ、しかも赤の。作者自身のかつとばしたい勢いの身体性を持った思春期・壮年期には、太平洋戦争あり、文筆でたてゆく暮らしあり、それは遠い存在であったのが、九十五歳まで生きていると思いがけなく体験できたりする。長生きの楽しさ、新しい経験を

まだまだ世界に見つけてゆく姿勢、生のよろこびがここにある。

家族の肖像

弟のエステイマは吠ゆ無事故無違反ゴロド免許の兄わたくしに

辻聰之「あしたの孵化」二〇一八年

無事故無違反ゴロド免許、は作者の人生そのものでもあるだろう。しかし本来誇るべきそれはここではやや自虐の色を帯びている。弟の威勢の良さにたじたとしている長男の顔だ。

この〈弟〉は、ギャル系女子である恋人が妊娠し、結婚して一女を成すも乳児のうちに離婚。

エステイマはファミリーカーが、セダンからミニバンに主流の移行する画期的な商品として一九九〇年に発売された。キヤッチコピーは、くしくも「トヨタの天才タマゴ」。歌集のタイトルは「あしたの孵化」、兄は未来に託しているものを凌駕して無鉄砲に繁殖行動に走る弟の顔が、フロントエンジンの轟音で吠えるエステイマの正面にありありと見えてくる。

白川ユウコ

「離婚したら名字どっちになるのがいい？」
走るボルボの灰皿あふれる

上坂あゆ美 『老人ホームで死ぬほどモテたい』二〇二二年
この相談事はすでに家庭が崩壊している状態の問題であるからして、車内には娘である作者と運転席の父親の二人きりと思われる。そんな小さな家族会議には本来、北欧の雪の積もった未舗装の道路を走るためのボルボの車体のサイズは無駄に大きいだろう。黙しがちな車内のむなし空間に漂う煙草の臭い。父親はその後出奔してフィリピン人女性と再婚したようだが行方はわからず、どうやら現地でも葬られた様子だ。静岡県沼津市の閉塞した土地柄、感性の合わない同級生たち、母と姉にはタトゥー、という環境に育ち、のちに上京して無頼に生き抜こうとしているひとりの年若い女性の作者の生きざま。父親の存在は、無用なボルボのように処分された。

男はバカだ

ランボルギーニらんぼるぎーにランボルギ

ーニLamborghini男はバカだ

陣崎草子 『春戦争』二〇一三年

イタリアの高級スポーツカーを見ている。カタカナ、ひらがな、アルファベット。一台をいろんな角度からか、もしくはたくさん並んで見る様々なモデルを見ているのだろう。どこらにしてもいくから見てもどこがいいのか。どこが違うのか。こんなものをありがたがるとは、「バカだ」。ばか、でもなく馬鹿、でもなくバカ。

絵本作家でもある作者は、歌集タイトルのように、春のうららかな風景／殺伐とした戦争の世界が背中合わせになって

いるこの社会構造の境目に立って両者を行ったり来たりする。ランボルギーニの中には〈乱暴〉があり、また〈ボル〉の音のリフレインは十二気筒エンジンの騒音と排気ガスの臭い、燃費の悪さからくる大気汚染への配慮のなさなど〈戦争〉世界の存在だ。それは〈男〉たちの価値観、そのシンボルとしてのランボルギーニ。

不法駐車のリモコンに爪を立ててゐる婦人警官のあはれ快感 塚本邦雄 『魔王』一九九三年

すると現実には、交通警察に従事している婦人警官も、違法駐車のリモコンを握る高層ビルに立つては「男はバカだ」と片付ける感性ではなからうか。この歌では塚本自身の欲求を、ヒステリックな制服姿の女性のコスチューム・プレイ(漫画「逮捕しちゃうぞ」が一九八六～一九九二年、テレビ東京「出動!ミニスカポリス」は一九九六～二〇〇一年。そのような接待を伴う飲食店も多数存在し、ちょっとしたブームであった)に憑依させて詠んでいるように思う。ねじれた狂おしい一首の立ち方。ここに男性である作者の倒錯した視線と妄想がからみついている。

遠くから手を振る代わりにウインカー点し
て去ったBMW 鈴掛真 『愛を歌え』二〇一九年

上の句のしぐさはDREAMS COME TRUE「未来予想図Ⅱ」(一九八九年)の文化圏内にいる人間のものだろう。作者はその作詞者の吉田美和とは性別を異にし、未来の予想図もない関係性の連作のなかの一首である。気障な別れの挨拶とBMWのとりあわせに利他的な優しさとパブルの残滓の虚飾、薄情な後ろ姿が見え、そして見送る者の苦笑と孤独感が漂う。

陣崎、塚本、鈴掛らの歌を並べてみた。若者の車離れ、とはこれらのような種類の欲望の減退のあらわれなのかもしれない。国内経済の衰退・お金の若者離れが主な要因であるものの、「有害な男らしさ」が女性からも男性からも敬遠されるようになり、そんな価値観がシフトしてゆく現在の傾向と重なっている。

愛車のリアル

愛車ノア十三年をともしして小雨降る今朝
わかれゆくなり

山田恵里『秋の助動詞』二〇一三年

〈子どもってすぐに大きくなっちゃうし生徒はすぐに卒業しちゃうし〉。高校の教員として生徒たちの、また母親として二人の娘の巣立ちを見守ってきた作者。歌集では五人家族であったころの追憶も描かれ、十三年間はその時間の中にあつた。いや、ノアの中にその時間があつた。夫婦と子ども三人の家族の員数も減ってゆく。この〈わかれ〉とは故障によるものか生活スタイルの変化による買い替えなのかはわからないが、長い時間をもにした愛車との惜別のかなしみはいかばかりか。旅立った生徒や子どもと違って、この車とは二度と会うことはないのだ。

へとへと君を迎えに MacBook より安かつ
たワゴンRで 平安まだら「短歌研究」二〇一三年

八月号「美しきワゴンR」

沖縄本島の住民のリアルな生活。それは観光客に見せるリゾート地の快適さとは真逆の、日本の政治経済の皺寄せの末端極地としてのありさまだ。〈美しい国 美しい国 よりも

次の車検が怖かったこと〉軽自動車（おそらく中古の）ワゴンRは必要に迫られて、趣味や楽しみではなく移動手段の必需品として安い値段を決め手に買ったものだろう。連作中にはアメリカ軍の基地とその文化文明が登場し、MacBookとの対比で、日本円の力の喪失と米ドルのインフレが直結している（へとへと）な沖縄の経済とくらしが象徴される。

自動車の歌を集めていると、自らの所有物として詠む歌が少ないことに気付いた。それはクルマが家財でありそれを誇るのとは卑俗なふるまいで歌人たるものはそれを避ける習性があるのか、また、車種でその世帯の収入の水準が判断されてしまうため作者のプライバシーにかかわってくるからか、とかく存在が俗に傾き詩性に乏しく、作品化するのが困難な素材としてマイカーが存在するように思われた。日本の自家用車普及率は二〇二一年時点で七七・九％。一九七〇年（昭和四十五年）には国内旅客輸送に占めるキロ分担率が鉄道を上回り、トラック等に対し乗用車は全自動車の五〇％を超え、二〇一三年現在、依然として国民は高い保有率をキープしている。にもかかわらず、心を込めて〈愛車〉を詠んだ山田のような歌は珍しく感じる。

憧れのひと

師のボルシェ掬きばんやり助手席に眺める
たれば城は近づく 黒瀬珂瀾「短歌研究」二〇一八年

年四月号「光が丘に星降る午後を」

CIMAにて越ゆる吉野の峠いくつ葛湯さく
ら湯こころにさやく

高野公彦『地中銀河』一九九三年

黒瀬の師は春日井建。二人のゴシックスタイルなキャラクターとドイツ車のボルシェから、〈城〉はヨーロッパのシヤトーかなにかのイメージを喚起させるのがおもしろい。じつさいには春日井の地元・愛知県内を観光したときの連作のなかの一首。城とは名古屋城か。

高野は自動車の運転はせず、自転車、家の鍵のみをポケットに入れて旅に出る。案内は〈ファックスのかたへに坐してCDのケチャックを聴くヤママユ庵主人〉すなわち前登志夫。この歌は彼の愛車とその運転であろう。葛、さくららの花々の姿とともに温泉めぐりも想わせつつ、サ行音の繰り返して霞むような紗がかかり、全体が一幅の掛け軸の遠景の絵画のようだ。

ボルシェなどの高級車をこのように純粋な憧憬をもって詠める時代はもう来ないような気がしている。自動車と短歌の蜜月はとても短かったのではないか。それは日本全体のありさまの端的なあらわれなのかもしれない。さらに、掛け軸のような日本画にしる油絵にしる、「芸術」的表現のなかに取り込むのが難しい素材として自動車がある。そのもの自体の造形デザインには時代時代の最先端の意匠が施されているにもかかわらず「描く対象」とはなりにくい。私見ではアクリル彩との親和性が高く、絵画の主題となるのは一九八〇年代のヒロ・ヤマガタあたりからではなからうか。

クルマを詠む

モノとしての自動車の歌が珍しいいっぽうで〈運転〉に着目した秀歌は多い。

ガレージヘトラックひとつ入らむとす少し

ためらひ入りて行きたり

斎藤茂吉『暁紅』一九四〇年

次々に走り過ぎ行く自動車の運転する人み
な前を向く

奥村晃作『三輪幼虫』一九七九年

古くは菊池剣、近藤芳美、最近ではタクシー運転手の高山邦夫、ダンプカーや重機を操縦する瀧音幸司などによる、自動車で行う労働の現場の歌が見つかった。世界的にガソリン車からの脱却志向はあるもののクルマの存在感は生活の中からもまだまだ消える気配はなく、運転という行為は、主体的にも観察的視点からもこれから歌い継がれてゆくだろう。

日常風景のなかにこんなに溶け込んでいるのに、短歌の中に見かけると、おやっと目を引いた自動車の歌。良きものとして悪しきものとして様々だが、いずれにしろおもしろい〈顔〉を持つものだ。この異物感に歌人たちはもつと挑戦してみてはどうだろう。

風刺的、批判的に詠むほうが扱いやすいように感じるが、自家用車は単なる移動の手段ではなく、濃い愛着の対象となりうる。それには世俗にまみれた財産以上の価値と思いが生じる。そこに、短歌の素材となる可能性が秘められているのではないか。われわれの生きている社会の風景にあるその存在は、表現にぐっとリアリティをもたらすのではないだろうか。挑戦する価値のあるモチーフである。